



子どもの笑顔が輝き

勢いのある学校

No. 4 (H30. 5. 1発行) 文責 校長 福田雅也

「無意図的教育」を「意図的」に

「本妙寺の鐘が鳴ったら、帰ってきなさい。」

これは、外遊びに出て行ったらなかなか帰ってこなかった子どもの頃の私が、母親から言われていた言葉です。当時、私達の家族は、熊本市内の島崎町に住んでいたもので、夕方の6時になると、近くにある本妙寺の鐘の音が聞こえてきてました。悪ガキだった私は、学校から帰ったら、宿題もせずすぐに遊びに出たまま鉄砲玉だったのです。そこで、母親は、私にこの言葉をいつも言っていたのです。

今、思い返しても、その頃の外遊びの面白かったことは忘れられません。「ビー玉」「メンコ」「缶けり」「三角野球」「魚とり」「クワガタとり」「秘密基地づくり」と時間がたつのも忘れて遊んでいました。そして、その遊びは、いつも近くに住む様々な年齢の子どもが集まっての遊びでした。その中では、けんか等のトラブルが起こるのも当然です。そのような場合、年長者がそれらのトラブルを解決したり、お互いに、どうにか折り合いをつけて(謝ったり、謝られたりして)解決したりもしていました。当時はこのように、大人から教えられるのではなく、自分達自身で必然的に学んでいく場面が多くありました。

これは、一種の「無意図的教育」だったのです。「学校教育」は目的に向かって計画的に行われる「意図的教育」です。地域の中で群れて遊んでいた頃は、遊びの中で、本来の目的(遊びを楽しむこと)とは違う内容を「結果的に」学んでいくことが多くありました。

先日、こんな場面がありました。登校の途中に転んで足を痛めた2年生の子どもを、6年生(女子)が背中に負ぶって学校まで登校してくれたのです。甲佐保育園の近くから負ぶってきたとのことだったので、かなりの距離になります。その2年生のランドセルは、同じ班の4年生が持ってきてくれました。私は感心しながら、その6年生と4年生にお礼を伝えましたが、6年生の子は特別なことではないという感じで、涼しい顔をしていました。これもまたすごいことだなあと、さらに感心してしまいました。

朝からとても嬉しく明るい気持ちになる場面でしたし、負ぶわれてきた2年生が上級生になったら、きっと下級生を優しく連れてきてくれるに違いない、と確信することができる場面でもありました。

この場面は、上級生が下級生の安全を確保しながら登校する「登校班」での出来事です。連休明けからは、「縦割り班掃除」や「縦割り班活動」も入ってくる予定です。私が育った時代のような地域の異年齢集団での群れ遊びがほとんどなくなった今の時代です。本来の「無意図的教育」とまではいかないまでも、少しでも「意図的に」そのような場面を作って、「6年生が優しくしてくれた。自分も上級生になったらあんなふうになりたい。」とか「上級生から掃除の仕方を教えてもらった。自分も早く下級生に教えられるようになろう。」というように、子どもたちが、体験を通して大切なことを学んでくれたらと考えています。